

大学教員から見た 『企業と大学の蜜月な関係』とは？

伊藤貴之

お茶の水女子大学 理学部情報科学科

2014年11月21日

ARG 第2回WI2研究会 ステージ発表

補足： 本資料は企業と大学に関する討論企画で、5名の登壇者が各々の経験にもとづいて企業と大学の関係について意見を述べ、続いて司会者の進行のもと登壇者間で議論を交わす、という内容でした。

経歴

- 1992年～2005年 日本IBM東京基礎研究所
 - 海外から非常に多くのインターンシップ学生を受け入れ
- 2005年～ お茶の水女子大学理学部情報科学科
 - 毎年3～5件の企業共同研究を実施
 - 勤務先学生へのインターンシップ斡旋も多数
- 海外の大学での数ヶ月単位の滞在3件
 - カーネギーメロン大学 (2000)
 - カリフォルニア大学デービス校 (2008)
 - シドニー大学 (2014)

インターンシップ

- 海外からIBMに来たインターンシップ学生の意欲
 - インターンシップ自体が重要な経歴
(履歴書に書ける業績、メンター等との人脈...)
 - インターンシップのために勉強を頑張ってきた、とも...
- 日本のインターンシップも(私の周囲では)よくなったが
 - 「現場を教えてもらう」というカラーがまだ強い
 - 大学でのスキル訓練(のための人件費)不足を痛感

インターンシップ

- お茶大に就職してみても...
IT企業のアプローチがとても積極的
 - 交通至便なのでいろんな企業が訪問に来る
 - 特に外資系企業は女性獲得に意欲的
- 訪問に来る企業はヒアリング内容のレベルが高い
 - カリキュラムの理解、履修内容の打診
 - 学生のスケジュール(いつなら人が集まるか)
 - 学生の進路観
 - 教員が企業インターンシップに期待するもの

産学連携（共同研究）

- アメリカ等の産学連携は規模が大きい
 - 大学院生を雇用しているのだから当然といえば当然
 - 産業のニーズに応える研究が高く評価される土壌が
できている
- それに比べて日本の大学は
「好きなこと」「夢のあること」を研究せよという
指向が強すぎるのでは
 - もちろん原則論としてそれは大いに結構であるが...
 - それとは独立な問題として、産業の現場に合わせた
ケーススタディやシステム開発研究も評価されるべき

産学連携（共同研究）

- いままでの共同研究で困った経験
 - 企業側にゴールやビジョンがない
「とりあえず作ってみましょうか」的な姿勢
 - 社内事情で契約や情報共有が進まない
 - 成果が出てから「やっぱり学会発表やめて下さい」
- （私にとって）持続性の高い共同研究体制
 - ゴールやビジョン、それに対する現状などを共有できる
 - 人間性も共有できる
 - 一緒に飲みに行った共同研究は大抵うまくいっている...
 - 1年単位での成果に左右されすぎない
 - 金額が高ければいいというものではない